論壇

人間のライフ・サイクルと現代

森田　孝
大阪大学人間科学部教授
本学会員

Human Life-Cycle in Modern Age

Takashi MORITA
Professor,Osaka University
Member,IATSS

1965年にユネスコのP.ラングランが提起したl'éducation permanente（永続的教育）という概念に触発されて、世界各地でいわゆる生涯教育ないしは生涯学習（lifelong education, or lifelong learning）の理念が生まれ、各種のプログラムが推進された。それは丁度その頃から急速に進展した世界各地での都市化現象と激甚な交通社会の出現、さらには通信革命などを含んだ広範な社会変化に対応するものであった。とりわけ日本において、上に述べた諸変化は一段と激しい形で現れたが、同時にこの過程は国民の平均寿命の著るしい延伸による、いわゆる高齢化社会への、これも急激な移行と同時進行した。そのためか、生涯教育にせよ、生涯学習にせよ、それらはもっぱら社会教育の問題として捉えられ、あるいは余暇活動を支える理念として理解されるにとどまる場合が多かったように思われる。

ラングランは、1970年に公刊した『生涯教育入門』の冒頭に、「生きることは、人間にとって、万人にとって、つねに挑戦の連続を意味するものであった」と書いた。ここで「あった」というのは、今日でも依然として「伝統的で、いわば人間の條件というに等しい」人生課題は、人間の社会や文化がどのように進展しようとも現存しており、「その強さや圧力をなんら失っていない」からである。

しかし現代は、人間が人間として生きてゆくための伝統的な課題に加えて、「今日の歴史的時点に固有な」一連の挑戦が、もう一方の半ばをなすものとして顕在化した時代である。「…世界や人間行動に関する説明の伝統的な図式を疑問に付するような一連の挑戦がますます増大する鋭さをもって加わってくる」と語られる諸変化のなかに、最初に挙げたような都市化、交通の激化、高齢化社会への急激な移行、通信革命に見られるような科学・技術体系の高度化などがあるわけである。

今日、教育の改革が日本だけでなく世界的な規模で求められているが、ここで求められる新しい教育が真に人間的な教育であるためには、教育を人間の全生涯との関わりのなかで捉え、また人間の全生涯をたえまない人生課題として、そういう意味での自己教育の問題としてみるという視点が大切だと思われる。そのような新しい教育理解のモデルが提起されなくてはならない。先のラングランが別の機会に述べた言葉で言えば、ここで大切なのは、apprendre á être、すなわち、「人間として生きることの学び」を主軸とすることである。「人間がより一層自分自身になるという意味での発展」の意味が求められ、また実現されなくてはならない。

人間の人間としての「生き方」を問い、人の一生を考えるとき、本来は人間の生と死の円環的なつながりについての宗教的な次元を切り捨てることはできないのであろう。およそ生命あるものの一生を「ライフ・サイクル」という概念で捉えるとき、それがサイクル（円環）と呼ばれる根拠はどこにあるのかという問題がある。生物学的な「生命環」ないしは「生活環」という考え方に立てば、それは「世代ごとに繰り返される発生・成長の経過」というふうに説明される。つまり何らかの形で次世代に新しい生命として連続しつつ、個としては完結するという点に円環のイメージを結ぶのであり、そのかぎりで、いわば現代において優勢な直線的な時間構造のイメージにけっきょくは一致するのである。

古代の壮大な円環的時間構造のイメージをここに呼び戻すことは容易ではない。しかし相対的に自己内に完結しながら進展するらせん型の時間構造が、人生の諸段階に有意味な節を見出し、そのつどに根源的なものに立ち返って、新たな始まりに立つということの大切さを知ることをうながすのである。

原稿受理　昭和62年3月6日